

被災地から宇宙へ： 福島発、公民連携による宇宙産業集積モデル

一般社団法人宇宙産業連携機構 但野 謙介、大出 大輔

事例の概要

本事例は「福島スペースカンファレンス」を土台とし、被災地の復興と宇宙産業振興の公民連携モデルを構築した。カンファレンスは「現地参加」に限定したオフライン開催とした。東日本大震災による津波被害や原発事故により避難を余儀なくされた街に、多くの宇宙関係者が足を運び、津波被災した沿岸の広大な土地を目のあたりにする中で、産業を創出し、地域の復興に貢献できる、宇宙分野の可能性を見出した。さらに具体策の議論を重ね、実証事業の受け入れや研究開発拠点・工場の立地を実現した。



津波に被災した場所で、住民が空を見上げた

受賞のポイント(選考委員講評)

被災地の復興として、新たな人の流れを作り産業創出のきっかけを創出している点は、高く評価できる。

産学官民の地域一体となったコミュニティを形成し、被災地の復興と宇宙産業の振興を推進している。結果として、宇宙スタートアップ8社が拠点を構え、民間投資を呼び込むとともに、ロケット打上げ実証も行われるなど、宇宙開発拠点としての実績を積み上げていることは、高く評価できる。

具体的成果等

1. 宇宙開発利用の新たな領域創造への貢献

東日本大震災により住宅の再建が制限される災害危険区域に指定された広大な土地を、地域の復興のためにも、宇宙産業が抱える「実証拠点不足」という課題と結びつけ、「ロケット打ち上げの最適地」という新たな可能性へと転換し、サブオービタルの実証を早期に具現化した。また、アイデアを実現させるため、理念を共有するコミュニティを構築した。「福島スペースカンファレンス」はあえて「現地参加」のみとし、官と民の間に強固な信頼関係を醸成し「基盤」として機能した。カンファレンスを通じて日本の宇宙産業の課題を議論したことを契機として、行政、研究機関、企業、地域住民が一体となった結果、民間企業等による新たな設備投資は100億円規模にのぼる。

2. 宇宙開発利用市場の拡大への貢献

宇宙スタートアップ8社が福島に拠点を構え、新たに宇宙関連の研究開発拠点が4か所新設、量産化を見据えた工場建設も進んでいる。さらに2025年、三菱倉庫による国内最大級の宇宙特化型インキュベーション施設「MLC SPACE LAB」が本格稼働し、産業集積が一層進んでいる。

宇宙産業の立地は、地域経済にも波及している。カンファレンスを通じて関係を構築した地元の福島企業およそ30社に対して宇宙関連の部品調達という新たなサプライチェーンが構築された。国内企業はもとより海外企業の視察など、国内外から被災地沿岸地域への注目が高まっている。

3. 経済・社会の高度化への貢献

「福島スペースカンファレンス」は、人口3,800人の南相馬市小高区に全国から400人以上が訪れる大イベントへと発展した。

「ロケット打ち上げ実証事業」：受け入れを通じて被災地にのべ440泊の宿泊需要を生み出すなど、地元に必要な経済効果をもたらした。また、太平洋に向けた打ち上げ最適地として、潜在可能性を示した。

「衛星データ活用」：衛星データを活用して農地の転作確認業務の負担を軽減できたと証明した。目視確認の規制緩和にもつながり、アナログな規制の見直し事例となった。

「インキュベーション施設の立地」：国内最大の宇宙産業に特化した施設が立地し、被災地復興の指針となる「福島イノベーション・コースト構想を基軸とした産業発展の青写真」にも盛り込まれた。さらには、JAXAの実証拠点が立地する能代市や角田市と連携した東北全域を挙げた産業集積の動きに広がりを見せている。

4. 技術への貢献

輸送分野では、「実証用地」や「工場用地」の確保が喫緊の課題で、従来は地権者交渉など事業者が自ら対応していた。実証においても、30にもおよぶ手続きを行政機関や民間団体等と調整する必要があった。事業者負担の多くを地域が支援することで、宇宙関連事業者が研究開発に専念できる環境が整い、研究開発や実証の効率化が進んだ。この官民連携による課題整理と行政のサポート体制は、宇宙開発スタートアップから「行政がベンチャーと同じスピード感で意思決定してくれる」と評価されている。ロケット打ち上げ実証は、その可能性が第1回カンファレンスで示唆されてから、わずか11ヶ月で実現した。

5. 国民理解の増進・人材育成への貢献

「福島スペースカンファレンス」を通じて、多くの視察や研修のニーズが生まれている。なぜ沿岸部に広大な土地が生まれたのか、その背景への理解を深めるため、被災された方々自身が案内する伝承活動も重視している。カンファレンスでは立場の異なる地域住民も登壇し、科学技術を社会に実装する上での課題を共有し、地域との向き合い方について議論を重ねている。

ロケットの打ち上げ実証に際しては、地元高校生を対象とした組み立て工程の見学や、実証後の出張授業も開催している。こども園の園児は、ブロック遊びの題材が電車やロボットからロケットへと変わり、ロケットを作って飛ばすことがあたりまえの世界を生きている。

